食物アレルギー対応給食のあり方３
－保育士の食物アレルギーに対する認識－

高　木　　瞳

Day Nursery Feeding to Cope with Food Allergy 3
－Recognition about Food Allergy among Nurses of Day Nurseries－

Hitomi Takagi

Summary

This report investigates recognition of food allergies among nurses working in Gifu Prefecture.

Among all nurses, 42.8% did not learn anything at all regarding allergies during their school days and 61.3% of them learned a little about it after being employed. Each nurse takes charge of more than 1.4 allergy children in one class and strongly wishes to take more training regarding allergies.

The fact that 21.1% of the nurses have been trying to remove food allergens in the child care room during lunch time has become clear through this investigation.

Received Sept. 28, 2007

Key words : food allergic infants, day nursery feeding, nurses

Ⅰ　はじめに

食物アレルギーは乳幼児期に多い疾病であるが、平成17年度の「リウマチ・アレルギー対策委員会報告書」によると学童期、成人にも認められ、その割合は、乳児が10%、３歳児が４～５%、学童期が２～３%、成人が１～２%といわれている[1)]。保育園では１クラスにほぼ１人、小学校では２クラスに１人程度の割合で食物アレルギー児がいることになる。

食物アレルギーは、時としてアナフィラキシーショックを起こして重篤な症状に至る場合もある。食物アレルギー対応給食の実施には、保育園の構成員全員の合意と保護者、医師との連携が不可欠であり、給食担当者とともに園児と長時間接する保育士の役割は重い。

そこで、保育園のアレルギー対応（対策）の現状と実施に向けての要求を把握するために、岐阜県の保育園職員およびアレルギー児の保護者を対象に調査[2)]を行い、園長と保護者の食物アレルギー対応給食に関する認識[3)]、そして乳幼児のアレルゲンと給食担当者の給食対応[4)]などを報告した。

今回は、保育士の保育室での食物アレルギー児とのかかわりの実態を明らかにすることを目的としたものである。

Ⅱ　保育士の食物アレルギー対応給食についての調査の概要

1．調査方法および調査期間

調査方法は既報[3)4)]と同様に、岐阜県下の公立および私立の全保育所の園長宛にアンケート調査用紙を郵送し、調査対象者の保育士２名の選出については園長に一任し、回答も郵送にて受取人払いで回収した。

調査期間は、2004年２月から３月であった。

2．アンケート内容および回収率

保育士に行った調査内容は、資料の通りである。本報告では、保育士の食物アレルギーに関しての認識、対応の項目についてまとめた。

510園に対して各園２名の保育士に調査依頼を行った結果、188園から回答があり、回答総数は341名であった。配布数1020に対する回収率は33.４％であった。

3．調査背景

表１は、調査協力園の施設設置形態別保育士の回収内訳を示したものである。岐阜県の保育所は公立園が全体の62％を占め、回答した保育士の所属においても、76.2％が公立園であった。

表１　調査協力園の内訳と保育士の所属

設 置 形 態	保育園数（％）	保育士数（％）
公立園	139（73.9）	260（76.2）
私立認可園	36（19.2）	63（18.5）
認可外保育施設	6（ 3.2）	11（ 3.2）
無記入	7（ 3.7）	7（ 2.1）
合　　計	188（100）	341（100）

図１は、保育士としての経験年数、図２は、保育士の職名を示したものである。経験年数が26～30年の保育士が23.8％と最も高いが、全体には１～20年経験者（52.2％）が半数以上を占めていた。また、保育士の職名で回答のあった69.8％は、クラス担任であった。

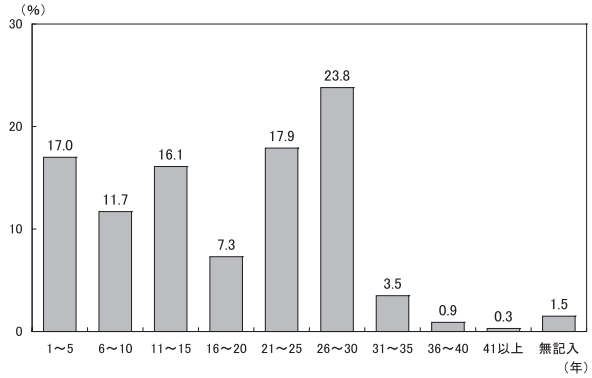

図１　保育士としての経験年数

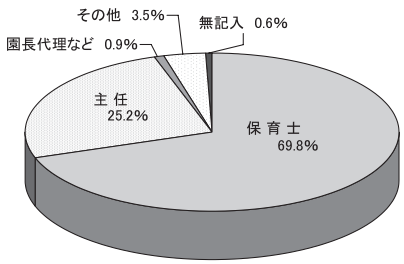

図２　保育士としての職名

表２は、保母および保育士（以後「保育士」とする）資格の取得先について尋ねた結果である。78.9%が養成短期大学での取得者で占められており、次が保育士試験（13.5%）によるとなっていた。

表２　保育士(保母)資格の取得先

n＝341

取　得　先	人　数（%）
高等学校	7（ 2.1）
専門学校	15（ 4.4）
短期大学	269（78.9）
四年制大学	1（ 0.3）
保育士試験	46（13.5）
保育士資格なし	1（ 0.3）
無記入	2（ 0.6）

（SA）

Ⅲ　調査結果および考察

１．アレルギーについての学習の程度

アレルギーに関する学習の程度を、保育士資格の取得期間と保育園勤務後について尋ねた結果を、図３に示す。

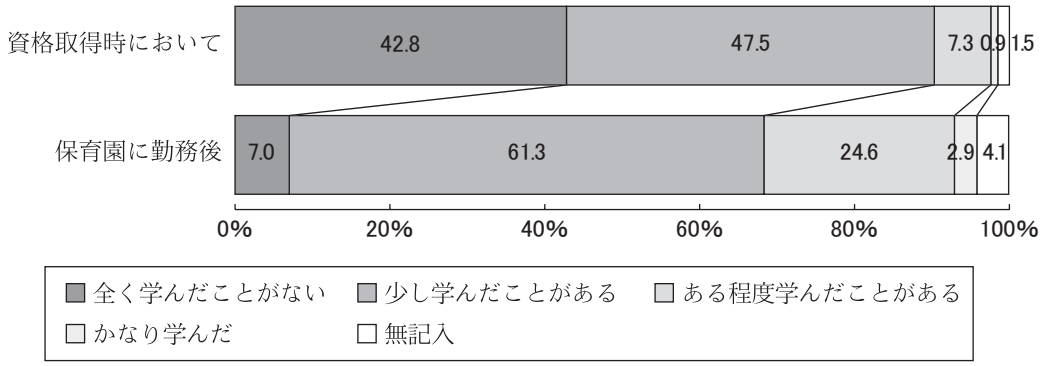

図３　アレルギーに関する学習度

資格取得期間では「少し学んだことがある」（47.5%）が最も多く、次に「全く学んだことがない」（42.8%）であった。90.3%が、「ある程度学んだ」との認識がなかったことになる。これは、図１に示すように20年以上の保育士経験者が46.3%占めており、乳幼児期におけるアレルギーの重要性が認識されていない時代背景があると考えられる。保育園勤務後の学習においては、7.0%が「全く学んだことがない」であったが、61.3%の保育士は「少し学んだことがある」と回答し、「ある程度学んだことがある」（24.6%）と「かなり学んだ」（2.9%）保育士は27.5%であった。現職の保育士の学習意欲と学習の機会が整備されていると評価できる。アレルギー児増加の傾向にある現在において、保護者との連携を強めるためにも、さらに現職保育士の研修機会の保障と保育士養成時におけるアレルギーの基礎教育が必要と考える。

２．担当クラスのアレルギー児数

受け持ちクラスにおいて保護者から申し出のあった食物アレルギー児の有無を、表３に示す。食物アレルギー児が受け持ちクラスにいる割合は、３歳未満児では68.0%のクラスに、特に０～１歳児においてはアレルギー児のいるクラスは78.6%と高い比率となっていた。３歳児以上のクラスにおいても61.7%であった。ほぼ３クラス中２クラスに食物アレルギー児がいることなる。

表 3　担当クラスにおけるアレルギー児の有無（回答341のうち不明・無記入17を除く）

担当クラス児の年齢		クラス数	アレルギー児有りのクラス数（%）	
0－2歳児	0歳児	6	5（83.3）	33（78.6）
	0－1	19	14（73.7）	
	1	17	14（82.4）	
	0－2	17	12（70.6）	33（60.0）
	1－2	23	11（47.8）	
	2	15	10（66.7）	
	計	97	66（68.0）	
3－5歳児	3歳児	104	67（64.4）	105（64.8）
	4	58	38（65.5）	
	3－5	3	0（ 0 ）	35（53.8）
	4－5	11	6（54.5）	
	5	51	29（56.9）	
	計	227	140（61.7）	
合　　計		324	206（63.6）	

表4は、担当クラスにおける食物アレルギー児数を示したものである。1クラスにアレルギー児1人のクラス（42.2%）が最も多いが、3歳児以上において5人いるクラスがあった。1クラスにアレルギー児数3人以下では、3歳児以上のクラスが3歳未満児クラスの2～4倍と高かった。

表 4　担当クラスのアレルギー児数　　n＝341

アレルギー児数	クラス担当者数（%）	0－2歳児	3－5歳児
0人	118（34.6）	31	87
1人	144（42.2）	47	97
2人	41（12.0）	13	28
3人	15（ 4.4）	3	12
4人	5（ 1.5）	3	2
5人	1（ 0.3）	0	1
無記入・不明	17（ 5.0）		

表5は、アレルギー児のいるクラスにおけるアレルギー児の割合を示したものである。アレルギー児のいるクラスの園児数から見たアレルギー児数の割合は、3歳未満児クラスでは0歳児（14.3%）が最も高いが平均では9.3%であった。3歳児以上のクラスでは平均6.9%であることから、年齢が低いクラスを担当する保育士はアレルギー児を多く受け持っていることがわかる。また、1クラス単位で見ると、年齢が低いクラスは園児数が少ないため1.42人となり、3歳児以上のクラス（1.44人）に比べて低かった。2歳未満児では、最も高い1.67人であったが、3歳未満児クラスの平均では1.42人となった。複数担任が考えられるが、いずれにおいても1クラス1.44人の

アレルギー児を担当していた。

表 5　アレルギー児のいるクラスにおけるアレルギー児の割合　n＝206

担当クラス児の年齢		クラス数	園児数（人）	アレルギー児数（%）	1クラスあたりのアレルギー児数（人）
0－2歳児	0歳児	5	65	7（14.3）	1.40
	0－1	14	194	18（ 9.3）	1.29
	1	14	205	20（ 9.8）	1.43
	0－2	12	191	20（10.5）	1.67
	1－2	11	171	17（ 9.9）	1.55
	2	10	182	12（ 6.6）	1.20
	計	66	1008	94（ 9.3）	1.42
3－5歳児	3歳児	67	1306	101（ 7.7）	1.51
	4	38	835	51（ 6.1）	1.34
	4－5	6	142	7（ 4.9）	1.17
	5	29	639	43（ 6.7）	1.48
	計	140	2922	202（ 6.9）	1.44
合　計		206	3930	296（ 7.5）	1.44

3．アレルギー児に対する給食での保育士の対応

アレルギー児のいるクラス担任に対して、「アレルギー児が複数いて、いくつかの異なる対応をしている場合は、あてはまるものすべて」を選ぶ方法で調べた。表 6 は、その結果を全体、3 歳未満児と 3 歳児以上のグループにまとめたものである。3 歳未満児と 3 歳児以上のグループにおいて差は少なく同様の傾向であった。全体で見ると、「特に対策をしていない」が10%近くあったが、食物アレルゲンを「給食室で除去」が50%を超え、「代替食を提供」においても45%であるなど、給食担当者による給食室での対応が高かった。しかし、保育士による食物アレルゲンの「保育室で除去」が20%以上あることは、給食時に保育士が全園児の配膳と調理された給食からアレルゲンの除去を行うことでの負担増による危険性があると考えられる。また、軽度のアレルギー児であっても、保育室でアレルゲン除去を行う場合の衛生的な配慮が必要である。保護者対象の調査では、誤配・混入経験が「ある」との回答が11.1%（31名）あった[5]。給食担当者対象の調査では、「食前までラップをかけておく」が15園（41.7%）と多かったが、「別室で食べる」「席を端にしている」「担任以外の職員が見守る」などの体制をとっているのは11園（30.6%）あったことを報告した[6]。アレルゲンの誤配・混入などの防止体制については、アレルギー児のいるクラスでは担任のみの対応では物理的に無理があり、会議等での具体的な対応策について検討することが求められる。ちなみに「アレルギーが議題になるか？」の回答では、「時々議題になる」が71.3%を占めていた[7]。

「その他」の記述においては、「家庭より調味料、代用品など必要時に持ち込み・持参」が11件、「病院・保護者と相談のうえで量を調節している」が 3 件、「飲み物・おやつのみ対応」、「動物アレルギー児は飼育小屋に行かせない」、「軽い」、「親からの要望がない」などであった。

表 6　アレルギー児に対する給食での対応の仕方

	全　体 （n＝206）	0 － 2 歳児 （n＝66）	3 － 5 歳児 （n＝140）
特に対策をしていない	20（ 9.7）	5（ 7.6）	15（10.7）
原因となる食物を保育室で除去	47（22.8）	14（21.2）	33（23.6）
原因となる食物を給食室で除去	105（51.0）	35（53.0）	70（50.0）
除去して代替食を提供	93（45.1）	30（45.5）	63（45.0）
お弁当持参	11（ 5.3）	3（ 4.5）	8（ 5.7）
その他	20（ 9.7）	5（ 7.6）	15（10.7）

（MA）

4．アレルギー対策の中心的な職員

表 7 は、アレルギー対策を実質的に一番中心となって行っている職員を尋ねた結果である。複数回答があったが、保育士から見たアレルギー対策を中心的に行っている人は、園長・主任と役職者が50.4％を占め、次に給食担当者（34.3％）で、保育士は最も少なく24.3％であった。「その他」の記述は、「全員で行っている」、「特に決まっていない」であった。

前報において保育園におけるアレルギー対応の窓口担当者は、「担任」と捉えている保護者が58.7％いることを報告[8]したが、保育士の回答からは、担任（保育士）はアレルギー対策の中心的な存在ではないことがわかった。アレルギー児と時間的には最も多くかかわっている保育士が具体的なアレルギー対策に積極的に取り組まれることが望まれる。

また、アレルギー対策のマニュアルの存在については、「園独自のマニュアルがある」は9.7％で、マニュアルがあっても「市町村で作ったマニュアルがある」が20.8％で、「とくにマニュアルはない」は62.8％であった。全職員で取り組むアレルギー対策が不十分な実態が見える。

表 7　アレルギー対策の中心的な人　　n＝341

アレルギー対策の中心的な人	回答数（％）
園長	141（41.3）
主任	31（ 9.1）
給食担当者	117（34.3）
保育士	83（24.3）
その他	13（ 3.8）
アレルギー対策をしていない	13（ 3.8）
無記入	16（ 4.7）

（MA）

5．アレルギー対策上の問題点

保育士から見たアレルギー対策をすすめる上での問題点についての調査結果を、表 8 に示す。保育士の回答で最も高いのが「給食の体制面」（33.1）で、3 位が「保育士のアレルギーに関する認識が高くないこと」（23.8）であった。「特に問題がない」は25.8％あり、保育士においても、前報で報告した園長の25.7％、給食担当者の27.5％[9]と同様の認識を持っていた。また、園長から見

た給食担当者と保育士の「アレルギーに関する認識が高くないこと」は、それぞれ15%前後あったのに対して、給食担当者自身は、11.7%と園長より低くなっていた。給食担当者から見た「保育士のアレルギーに関する知識が高くないこと」は2.9%とさらに低く、給食担当者自身と比べてアレルギーに関する知識は保育士の方が高いと思っていることを報告した[9]。しかし、保育士自身は、23.8%が「アレルギーに関する知識が高くないこと」と回答しており、日々アレルギー児に対応している当事者としての問題点を示している。

表 8　アレルギー対策上の問題点　n＝341

アレルギー対策上の問題点	回答数（%）
保育士のアレルギーに関する認識が高くないこと	81（23.8）
給食の体制面	113（33.1）
市町村の認識	45（13.2）
アレルギー給食を行う予算措置がないこと	32（ 9.4）
特に問題はない	88（25.8）
無記入	36（10.6）

（MA）

6．保育園のアレルギー対策の今後の課題

表 9 は、保育園のアレルギー対策をすすめる上で、今後必要な内容について尋ねた結果である。

「アレルギー対策に関する保育士の研修（講演や学習会）」が76.2%と高く、保育士自身が研修の機会を求めていることがわかる。

給食担当者に対する要求も高く、「給食担当者の研修（講演や学習会）」（47.2%）と「給食担当者の研修（調理の研修）」（45.7%）をあわせると92.9%と高率で、給食担当者のアレルギーの知識と調理技術など、給食内容の整備に期待が高いことがわかる。

また、保育士から見て「アレルギー児の保護者の研修（講演や学習会）」（39.9%）の必要性が比較的高かった。このことは、アレルギー児を取り巻く全ての人がアレルギーについて共通認識を持つことの重要性を示唆している。研修の実施がアレルギー対策の重要な課題といえる。

表 9　保育園のアレルギー対策の今後の課題　n＝341

アレルギー対策の今後の課題	回答数（%）
保育士の研修（講演や学習会）	260（76.2）
給食担当者の研修（講演や学習会）	161（47.2）
給食担当者の調理の研修	156（45.7）
アレルギー献立の提供	95（27.9）
アレルギー給食用の食材の提供	97（28.4）
アレルギー児の保護者の研修（講演や学習会）	136（39.9）
その他	10（ 2.9）
無記入	19（ 5.6）

（MA）

7．アレルギー用語の認知について

アレルギー用語の「アレルゲン」、「IgE」、「除去食」、「アナフィラキシー」、「負荷テスト」について、その意味を知っている程度を4段階で尋ねた結果を図4に示す。

「除去食」の意味は「詳しく知っている」(18.5%)、「ある程度知っている」(51.3%) をあわせると69.8%となり、認知度は最も高かった。「詳しく知っている」においても「除去食」が最も高く、「この言葉を知らない」(3.2%) においても最も低かった。

「この言葉を知らない」アレルギー用語は、「IgE」(68.6%) と「アナフィラキシー」(58.4%) が高く、「IgE」においてはおおよそ3人に2人が、「アナフィラキシー」は2人に1人が「知らない」ことになる。

「アレルゲン」の認知度は、「少し知っている」(39.6%)、「ある程度知っている」(35.5%) の順であった。「詳しく知っている」は、6.2%であった。

「負荷テスト」については、「この言葉を知らない」(35.5%) と「少し知っている」(35.2%) がほぼ同じ割合となっており、次に「ある程度知っている」(16.7%) となっている。「IgE」用語の次に認知されていないといえる。

保育士として食物アレルギー児の給食における対応では、アレルギーの原因食品にあたる「アレルゲン」と、それを給食から除く「除去食」が理解されていることが必要と考える。

また、「アナフィラキシー」については、誤食・混入によるショック症状の危険性があり、園でのアレルギー対策の中では最も重要な課題である。用語の認知度は、安全な対応の基本となるので、早急に専門家による研修が求められる。

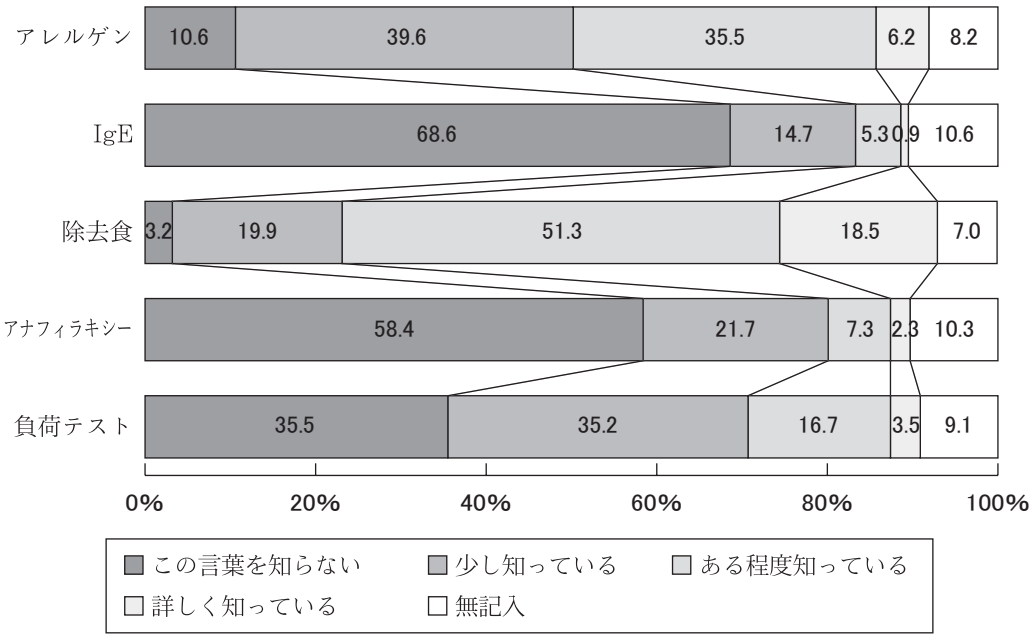

図4　アレルギー用語の認知の程度

８．保育士としてのアレルギーに関しての意見・要望

「アレルギーに関しての意見・要望」について、保育士の立場から自由記述で調査した。記述内容は大きく６つにまとめられ、具体的には以下に示すとおりである。（　）内の数字は記述者数を表わす。

①アレルギーに関する研修の必要性（21）

- アレルギー児が増えている。アレルギーやその対処の仕方などについてもっと学習が必要・学習したい（11）
- 家庭と連絡を取り合いお互いの信頼のもとで保育されるべき。私たちもアレルギーについて学んでいく機会がほしい（１）
- 保育士は親に代わって子どもにかかわる仕事。親以上に専門的知識が必要だから、研修がもっと開かれてもいいと思う（１）
- アレルギーについて勉強できる場や、わかりやすい書物などがあるとよい（１）
- クラスにアレルギー児がいたことで勉強することができた。もっとアレルギーについて学び、子どもたちに接したい（１）
- 親も気づかず好き嫌いと思っていた園児がバナナアレルギーと診断されゾッとした。それ以来子どもが嫌いな食べ物は実はアレルギーで体が嫌がっているのかもしれないと怖い気持ちがある。しっかりアレルギーについて学ぶ機会があるとありがたい（１）
- 一歩間違えて与えたものが命取りといったことも聞きます。大切な分野ですのでもっと学んでいきたい（１）
- 家族やクラスにアレルギー体質の人がいないので学ぼうとしていないが、もう少し真剣に考えなければならないと思う（１）
- 食物アレルギーだけでなくアレルギーについて幅広く知る上でも、講習の機会や実態をもっと詳しく知る必要があると思う（１）
- 食物アレルギー以外のハウスダスト、ダニ、薬アレルギー等の子どもがいるが、あまり問題視されていないのでは・・・（２）

②連携の必要性（６）

- 勉強すると同時に親さんと連絡を密に取らなくてはいけないと感じる（３）
- 保育士・調理員・保護者がもっと連携し合っていくべきであると感じる（１）
- アレルギー児の保護者と深く話し合うことが大切。職員内の意識向上のために話し合っていきたい（１）
- 食物アレルギーの場合、園と家庭で協力し合って進めると、軽い子は完治することを多く経験した。園側の姿勢、親の取り組み方の大切さを感じる（１）

③アレルギー児の保護者に対する要望（４）

- 親の判断で除去するのではなく、医師の診断に応じて除去していくよう、診断書や経過書などをもとに、園での除去食が進められるとよい（２）
- アレルゲンテストをしっかりした上での保護者からの要望ならすすんで協力したいが、保護者自身が曖昧に除去を希望されるが、家庭では除去をゆるめている。園の体制以前に保護者の認識にも問題を感じる（１）
- 成長とともにアレルゲンは変わるので、せめて１年に１回は検査をしてほしい（１）

④制度および体制での問題（６）

・私立保育園では職員数に限りがあり、調理員数がそのままで除去食やアレルギー児に心配りと神経を使い大変さが増すばかりが現状。国や市町村で補助金など今後考えてほしい（1）
・市町村では、除去した代わりのものを作る対策はない。毎日の主食等のアレルギーでは、調理も含めて代用献立も必要になってくると思う（1）
・除去・代替食を作るのは現在の体制では厳しい面がある（1）
・アレルギーの子が増え、個々に対応が違うので、間違いなく安全に調理ができるような人員配置（パートでも可）をしていただくとよいかと思う（1）
・集団保育のため、配膳・食事中と、命にかかわることなのでとても神経を使っている。まして調理員はそれ以上と思う。アレルギー児は増えてくるので調理室や人員を見直し、安全に保育していけるといいと思う（1）
・給食のみならず保育中にかゆがり、自分の体を傷つけて痛がったり、ストレスを受けている。細菌等にも十分注意が必要なため、物的な環境整備も市町村レベルで行ってほしい（1）

⑤アレルギーに関しての疑問（3）
・程度の軽いアレルギー児しか見ていないが、ほとんどの子が家庭でも少しずつ卵などを食べさせると慣れてくることが多い。あまり神経質過ぎると逆に良くないのではと思える例が多い。その子にどれだけの負担があるかが目では見えにくいので、症状が出なければいいのかなと、判断してしまう（1）
・食物アレルギーは大人になるにつれて治っていくものなのですか？ ある程度の年齢になったら除去していた食べ物の慣れるために少しずつ食べるようにしていったらいいのでしょうか？（1）
・食物アレルギーではなくハウスダスト等で全身を血が出る程にかいている子。薬をまめに塗るが、かゆいがために全てのわがままがとおり、楽しむこともできず孤立してしまう。そのような子にどのように対応すればよいのか悩む。性格まで歪んでしまっているようでかわいそう（1）

⑥アレルギーにかかわっての経験から（2）
・主任・調理員・保護者で相談して献立を立てており、おやつもほとんど手作り。アレルギー児用のカレーを全園児で食べたり、バイキングはアレルギー児に合わせたり配慮している。調理室は大変でしょうが、アレルギー児もみんなと一緒ということで喜びを感じている。子どもたちの顔を見ていると、そんな園が増えればいいなと思う（1）
・アレルギー児の親との考えの違いに苦労したが、アレルギーについて少し勉強ができよかった。本人だけでなく、親の気持ちを満たすのは難しい（1）

保育士の「アレルギーに関しての意見・要望」の中で「研修の要望」が最も多いことがわかる。次に、職員・保護者の連携の必要性や制度・体制の整備などの記述となっていた。

また、アレルギー対応給食実施に伴う給食室の苦労にも理解が見られ、今後の保育士・給食担当者・保護者の連携の取り組みに期待がもてる。

Ⅳ 要 約

本稿は、望ましい食物アレルギー対応給食のあり方を検討するための資料として、岐阜県の全保育園の園長、保育士、給食担当者およびアレルギー児の保護者を対象に行ったアンケート調査

結果をもとにまとめたものである。188保育園から、食物アレルギー対応給食の実態と、それぞれの立場での考え、要望などを得ることができた。

ここでは、保育士のアレルギー児に対する給食時の対応、アレルギー対策を行う上での考え、アレルギーの知識など実態を分析したものである。要約すると以下のようになる。

１）アレルギーに関する学習の程度は、保育士資格取得期間では「少し学んだことがある」(47.5%)が最も多く、次に「全く学んだことがない」(42.8%）であった。保育園勤務後の学習においては、「全く学んだことがない」が7.0%あったが、「少し学んだことがある」(61.3%）が最も多く、27.5%は「ある程度学んだことがある」(24.6%）と「かなり学んだ」(2.9%）保育士であった。

２）食物アレルギー児が受け持ちクラスにいる割合は、３歳未満児では68.0%のクラスに、特に０～１歳児においてはアレルギー児のいるクラスは78.6%と高い比率となっていた。３歳児以上においても61.7%であった。また、食物アレルギー児のいるクラスのアレルギー児数は、１クラスに１人（42.2%）が最も多いが、３歳児以上において５人いるクラスがあった。１クラス単位で見ると、平均1.44人のアレルギー児がいることがわかった。また、１クラスにアレルギー児数３人以下では、３歳児以上のクラスが３歳未満児クラスの２～４倍と高かった。

３）アレルギー児に対する給食での対応は、食物アレルゲンを「給食室で除去」は51%、「代替食を提供」も45%あり、給食担当者による給食室での対応が高かったが、保育士による食物アレルゲンの「保育室で除去」が22.8%あった。「特に対策をしていない」が10%近くあった。

４）保育士から見たアレルギー対策をすすめる上での問題点については、「保育士のアレルギーに関する認識が高くないこと」(23.8）が、「給食の体制面」(33.1)、「特に問題がない」(25.8%）につづく３位であった。

５）アレルギー対策の今後の課題として、「アレルギー対策に関する保育士の研修（講演や学習会)」が76.2%と最も高く、保育士自身が研修の機会を求めていることがわかった。また、給食担当者に対する要求も高く、「給食担当者の研修（講演や学習会)」(47.2%）と「給食担当者の研修(調理の研修)」(45.7%）をあわせると92.9%と高率であった。保護者に対しても「アレルギー児の保護者の研修（講演や学習会)」(39.9%）の必要性が比較的高かった。

６）一般的なアレルギー用語の認知度については、「除去食」が最も知られており、認知度の低いアレルギー用語では、「IgE」がおおよそ３人に２人、「アナフィラキシー」は２人に１人が「知らない」であった。

７）保育士の「アレルギーに関しての意見・要望」の中では「研修の要望」が最も高かった。次に、職員・保護者の連携の必要性や制度・体制の整備などの記述となっていた。

Ⅴ　おわりに

食物アレルギー対応給食は、原因となる食物（アレルゲン）を給食から除去し、それと同等の栄養が得られる食材を代替食品として使用した対応給食が望ましいと考える。この実現には、給食担当者のアレルギー対応の献立作成と調理技術が、そして施設設備の充実、給食担当者の増員など園長や行政の理解が求められる。また、アレルギー児の給食内容の理解や園生活での支援には保育士の協力も不可欠である。

調査でもわかるように、保育士はアレルギー児を受け持ちながらも、アレルギーについての知識の不十分さを感じ、研修の必要性を訴えている。

食物アレルギーについては、2002年にアレルギー物質の食品表示が制度化を皮切りに、2005年には『食物アレルギーによるアナフィラキシー学校対応マニュアル小・中学校編』が作成され、さらに、厚生労働科学研究班から 『食物アレルギーの診断の手引き2005』が、日本小児アレルギー学会からは『食物アレルギー診療ガイドライン』が発行されるなど、食物アレルギーの標準的な考え方が整理されてきた。食物アレルギーに関する科学的な知識や社会制度は進化しているのである。

しかし、これらの情報や研修は、医師やアレルギー児の保護者の段階にとどまり、食物アレルギー児にかかわる全ての専門家に周知されていないのが実態である。近年、食物アレルギーについての社会的認知はされてきたが、さらに具体的な取り組みに発展しにくい原因がここにあると考える。

最近の調査でも幼児の食物アレルギーの増加が報告[10]されており、保育士に対して「保育所における食育に関する指針」[11] で示されている食育の実践と同時に食物アレルギー児の対応など、期待は高い。学校においても、「食育」の一環として学校栄養教諭が導入された。

科学的な知識や社会制度の変化などの研修は必要で、保育士においても同様である。

研修や仲間との連携で、すべての子どもが安心して楽しく集団生活が送れ、すべての子どもが安心して楽しく給食が食べられる環境を目指したい。

引用文献

1）厚生科学審議会疾病対策部会リウマチ・アレルギー対策委員会；「リウマチ・アレルギー対策委員会報告書」平成17年10月、p.19

2）アレルギーネットワーク岐阜地域連絡会；『保育園におけるアレルギー対応に関する調査報告 食物アレルギー対応給食に関する調査結果（岐阜県）』2005年３月　㈱ディーアンドエイチ

3）高木瞳；「食物アレルギー対応給食のあり方－家庭の実態と保育園のすすめ方－」、岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要第38集、pp.13－32、2006年２月

4）高木瞳；「食物アレルギー対応給食のあり方２－乳幼児のアレルゲンと給食担当者の対応－」、岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要第39集、pp.17－35、2007年２月

5）前掲書；「食物アレルギー対応給食のあり方－家庭の実態と保育園のすすめ方－」、p.19

6）前掲書；「食物アレルギー対応給食のあり方２－乳幼児のアレルゲンと給食担当者の対応－」、pp.22－23

7）前掲書；『保育園におけるアレルギー対応に関する調査報告　食物アレルギー対応給食に関する調査結果（岐阜県）』、p.42

8）前掲書；「食物アレルギー対応給食のあり方－家庭の実態と保育園のすすめ方－」、p.18

9）前掲書；「食物アレルギー対応給食のあり方２－乳幼児のアレルゲンと給食担当者の対応－」、p.28

10）東京都福祉保健局健康安全室環境保健課；「アレルギー性疾患に関する３歳児全都調査（平成16年度）報告書」平成18年３月発行

11）厚生労働省児童家庭局保育課長；「楽しく食べる子どもに－保育所における食育に関する指針－」平成16年３月

資　料

保育園におけるアレルギー対応に関する調査票《保育士対象》

＊あてはまる答えの数字に〇をつけて下さい。

＊（　　）の中には言葉や数字を記入して下さい。

【１】あなたの保育士としての経験年数は何年ですか。

保育士経験年数(今年も含めて)　（　　）年目

臨時職員なども含めて、保育に携わっていた年数を今年度も１年と数えてお答え下さい。

【２】あなたの現在の職種をお答え下さい。

１.保育士　２.主任　３.園長代理など　４.その他

【３】あなたは保育士(保母)資格をどこでお取りになりましたか。

１.高等学校で取得した　２.専門学校で取得した　３.短期大学で取得した

４.四年制大学で取得した　５.保育士試験で取得した　６.保育士資格を持っていない

【４】保育士資格を取得するにあたって(学校や講習で)、アレルギーについてどの程度学びましたか。

１.まったく学んだことがない。保育士(保母)資格を取得した当時はアレルギーの問題はほとんどなかった　２.少し学んだことがある　３.ある程度学んだことがある　４.かなり学んだことがある

【５】あなたは保育園に勤めるようになってから、アレルギーについてどの程度学ばれましたか。

１.まったく学んだことがない　２.少し学んだことがある　３.ある程度学んだことがある

４.かなり学んだ

【６】現在の受け持ちのクラスの状況をお書き下さい。もし、あなたがフリーの保育士の場合は主に一番担当することの多いクラスについて記入して下さい。混合クラスの場合はその旨お書き下さい

担当クラス	歳児
子どもの人数	人
うち食物にアレルギーがある子どもの数	人(保護者から申出のあった数を記入して下さい)

【７】あなたのクラスのアレルギー児に対する給食で次のような対応をしていますか。アレルギー児が複数いて、いくつかの異なる対応をしている場合は、あてはまるものすべてに〇をつけて下さい。

１.特に対策をしていない　２.原因となる食物を保育室で除去している

３.原因となる食物を給食室で除去している　４.原因となる食物を除くだけではなく、代わりの食材を使って調理した給食を出している　５.お弁当を持参している　６.その他（　　）

【８】職員会議で園児のアレルギーのことが議題（話題）になりますか。

１.ほとんど議題にならない　２.ときどき議題になる　３.よく議題になる　４.その他（　　）

【９】あなたの園にはアレルギー対策のマニュアルはありますか

１.市町村で作ったマニュアルがある　２.園独自のマニュアルがある　３.とくにマニュアルはない

【10】あなたの園でアレルギー対策の中心になっているのはどなたですか。実質的に一番中心的だと思われる方をお答え下さい。

１.園長　２.主任　３.給食担当者　４.保育士　５.その他（　　）６.アレルギー対策をしていない

【11】園でアレルギー対策をすすめる上での問題点はどこにあると思いますか。

１.保育士のアレルギーに関する認識が高くないこと　２.給食の体制面

３.市町村の認識　４.アレルギー給食を行う予算措置がないこと　５.特に問題はない

【12】保育園のアレルギー対策をすすめる上で、今後どんなことが必要だと思いますか。

（あてはまるものすべてに○）

1.アレルギー対策に関する保育士の研修(講演や学習会)

2.アレルギー対策に関する給食担当者の研修(講演や学習会)

3.アレルギーの調理に関する給食担当者の研修(調理の研修)

4.アレルギー献立の提供　　5.アレルギー給食用の食材の提供

6.アレルギーの子をもつ保護者を対象とした講演や学習会　　7.その他（　　）

【13】園の概要について記入して下さい。

設置形態　1.公立園　2.私立認可園　3.その他（　　）

園児数　約(　　)名

保育士数(臨時・嘱託職員は含め、パートは除いて下さい)　約（　　）名

給食担当者数　専任（　　）名　臨時・嘱託職員（　　）名

【14】あなたの園の給食の献立はどのように作成していますか。一番近いものを選んで下さい。

1.自治体の統一献立　2.自園で献立作成をしている　3.その他（　　）

【15】あなたの園の給食の調理はつぎのうちどれですか。一番近いものを選んで下さい。

1.給食センターや学校の給食調理場で調理している　2.自園で調理している

3.その他（　　）

【16】あなたは、次のアレルギー用語の意味についてどの程度ご存じですか。

次の１～４を選んで（　）に記入して下さい。

1.この言葉を知らない　2.少し知っている　3.ある程度知っている　4.詳しく知っている

・アレルゲン……（　　）　・Ig E ……（　　）　・除去食……（　　）

・アナフィラキシー……（　　）　・負荷テスト……（　　）

【17】最後に、アレルギーに関してご意見・ご要望などがありましたらご記入下さい。

また、私たち特定非営利活動法人「NPO アレルギーネットワーク」に対するご要望などでも結構です。

調査は以上です。ご協力ありがとうございました。調査用紙は園長先生にお渡し下さい。